【特色あるフロンティアスクールの取組事例】

都道府県番号	１７
都道府県名	石　川

（①□　②□　③☑）

Ⅰ．学校の概要

高松町立高松中学校							
	１年	２年	３年	特殊学級	計	教員数	
学級数	３	３	３	１	１０	１７	
生徒数	９５	９７	１０１	１	２９４		

Ⅱ．実践研究の概要

・主題

「自ら学ぶ力を育む学習活動の創造」

～新学習指導要領に基づく学力向上を図るための教育実践～

・テーマ設定の趣旨

社会の情報化が進展する中で、知識・情報を獲得することが容易となったが、もっと価値ある新しいものを生み出す創造性が強く求められている。教育界では、今年度から、新学習指導要領の内容が、これまでより３割削減されたということから、学力の低下が懸念されている。したがって、各学校においては、学力の捉え方を明確にし、その向上を目指すことが、今日に迫られた課題であると思われる。

本校の生徒は、全体的に温厚で親しみやすく、素直でまじめである。反面、学習態度は受け身で、自分の考えを積極的に発表しようとする生徒が少なく、他者とうまく関われない生徒もいる。また、物事に対して見通しを持ち、人に頼らず自分で考え、判断し、自分から行動していく力がやや弱い。

そこで、これまでの移行期間中は、

・身近なことから、自ら興味、関心を抱くものを探し出し、追求しようとする姿勢

・課題に対し、積極的に解決しようとする姿勢

・課題解決に際して、必要な情報を選択、理解、活用する力

を高めるために、特に、「総合的な学習の時間」の試行、実践及びそれとの関わりを意識した各教科の授業を通して、生徒の自ら学ぶ力を育みたいと考え、研究を進めてきた。その結果、本校における「総合的な学習の時間」の指導体系が出来上がってきた。

そして、今年度、いよいよ新学習指導要領の完全実施となったわけだが、これまでの成果を生かしつつ、さらに、

・自分の思いや考えを的確、適切に表現し、他に伝達したり、受け取ったりする力

・相手を理解し、そして互いに価値を学び、協調、共生しようとする姿勢

も高めることを目指して、本主題を継続し、それに迫る学力の向上を目指す研究を進めていくために上記のような副題を設定した。

Ⅲ．実践研究の内容について

（１）研究体制の工夫

今年度より、絶対評価で生徒・保護者に示すことになり、評価規準とその判断基準の必要性が差し迫った状況となった。そこで「新学習指導要領に基づく学力向上を図る教育実践」の一つとして、評価を生かした指導の充実を図ることを検討した。そのために、まずは、評価規準を作成していくことで、その意味を知り、教材を深く分析し、そうして本校の学力向上に繋げていこうと考えた。

最初に、本校の生徒に対し、趣旨に述べたような力や姿勢を高めるために、また、学力の劣っている部分を高めるためにどこに視点を当てて評価していけばよいか、どのような評価の方法が望ましいのか、どのような評価計画がよいのか、といったことを練っていくための体制を整えた。その結果、今年度、評価規準を作成する計画を次のように進めていった。

	全体会	評価規準表作成に向けて（評価に関わる取り組み）
一学期	・研究の方向 ・研究主題の検討 ・学力の定義	・　今年度の教育課程の進め方について ・　必修教科における観点別評価の内容作成 ・　通知票の形式と見方についての検討と作成 ・　必修教科における単元別評価規準表の内容についての検討 ・　観点別評価と評定の関係についての検討
夏休み	・講義 「評価について」	・　必修教科における単元別評価規準表の作成（１回目） ・　選択教科における総合評価規準、観点別評価の内容とその規準の検討 ・　本校における学力の分析
二学期 冬休み	・観点別評価の内容の完成	・　各教科からの必修教科における単元別評価規準表の情報交換 ・　必修教科における単元別評価規準表の作成（２回目） ・　２回目に作成した評価規準表での授業実践 ・　必修教科における単元別評価規準表の完成（３回目）

（２）実践研究の内容

《一学期・夏休み》

昨年度は、各教科の全領域に渡る観点別の評価規準を作成したが、今年度は、実際利用できる評価規準を作成しようということで、各自一単元（一題材）を選択し、それを追求した評価規準表を作成しようということになった。実際利用できるために、ただ、規準にあたる文を、観点別に書いておくだけではなく、その規準を計るためにどのような方法で行うかという「評価の方法」とその方法をどのような基準で行っているかを示す「評価の実際」を記すこととした。

１１月に実際その評価規準表を使って、授業を進めるということで、その頃に行う予定の単元（題材）の部分を作成した（１回目）。そのために、指導主事より、「これからの評価の基本的な考え方、評価規準、評価方法等の工夫改善」というテーマでの講義を設け、作成する一助にしていき、いろいろなサンプルを参考に、じっくりと検討した。

《二学期・冬休み》

ところが、出来上がりを見ると、余りに盛りだくさんの内容だった。評価規準のサンプルは、書籍やある研究所などから出回っているが、おおよそ、その内容のまま進めていくことは、量的に多く、実際行おうとすると、極めて難しいと感じた。つまり、実際の授業で、サンプルにある評価をすべてしようと思うと、その方法を何にしようか、処理はどうしようかと考えていけばいくほど、時間に追われ、結局、評価のための評価になってしまうと感じたのである。したがって、実際の利用価値が低いと感じ、再度、内容について確認した。

１１月、実際の授業を迎えるにあたって、「評価の方法」に記されている中で、使用するワークシートやプリント、小テストなどの検討と作成、さらに、評価するための判断基準を示す「評価の実際」の検討に入った。夏休みに作成したものにつけ加えて、より質の高い内容となるように、評価規準を精選し、２回目の作成に入った。

そして、いよいよ授業実践が始まり、検討した評価規準表で進めていった。ただ、評価のための評価に終わらないように、Ｃ・Ｂと評価した生徒をＢ・Ａにするには、どう支援していけばよいかを意識して授業を行った。例えば、あるワークシートの課題で、あてはまる答を考え記入させたいとする。その時、いくつかの答を自らの力で書き込むことができればＢと判断しているのだが、何も書き込むことのできない生徒に対し、きっかけとなる言葉やヒントを与えることで、意欲や理解度を高めさせるといったことである。このように、評価規準表によって、Ｃ・Ｂと評価された生徒に対する支援のポイントが明確になり、その結果自ずと学力向上に繋がるものと思われる。また、本校では、グループ活動を生かして、自己表現力を高めることも進めており、そのことを高めるための支援も意識して行っていった。

１２月、作成した単元（題材）の授業実践が終わり、実際行ったことを踏まえて、最終的な評価規準表を完成させた（３回目）。同時に、「評価の方法」を見直したものと「評価の実際」では、使用したワークシートやプリントの全てを掲載することにした。

（３）成果と課題

○　評価規準表の作成によって、単元の目標に、より迫る展開で進めていくことができるほか、個に応じた支援がしやすく、結果として、一人一人のレベルアップにつながった。

○　１回目に作成した評価規準表を他教科の先生方にも見ていただいたことによって、違う視点から意見をいただき、見直しのよい材料となった。
○　２回目の作成後、その規準で実際授業を行ったことによって、書かれてある「評価の方法」で本当によいのかどうか納得することができ、判断基準の明記によって評価も行いやすかった。
○　個に応じた支援を適時に行うためには、さらに子どもをよく見つめ、また見つめる目を養わなければならない。したがって、常日頃から生徒と関わり、理解・観察し、ノートやテストなどでも生徒の情報を仕入れておくことが必要である。
○　今回の評価規準表は、小単元ごとに分けた表だったので、どの時間に行うかが不明であった。よって、授業１時間ごとの表を作成すれば、どの時間でどの評価を行うかが明確になるのではないかと思われる。
○　本校の生徒の実態を踏まえて、各教科の目標をどのようにして身につけさせていくか、さらに分析・検討し、特に、Ｃ・Ｂと評価した生徒を、Ｂ・Ａに引き上げていくには、どのような支援がよいか、今後も大いに検討を続けていくことが必要である。

【例：３回目の評価規準表の一部（２年数学：平行と合同)】

次	主な学習内容	関心・意欲・態度	数学的な見方・考え方	数学的な表現・処理	知識・理解
第二次 合同な図形 （８時間）	証明のすすめ方 ○　仮定と結論の意味を理解し，簡単な命題で区別する。 ○　証明のすすめ方を理解し，証明の根拠となることがらを明らかにしながら証明する。 ○　証明の根拠となることがらをまとめ，それをもとに図形の性質を考察する。	・証明するための根拠をみつけようとする。（観察）	・根拠となることがらを明確にして，図形の性質を考察し，それを証明することができる。 （プリント）	・証明の根拠となることがらを明らかにすることができる。 （ワークシート）	・図形の性質の証明を読み取ったり表したりすることができる。 （自己評価）

【例：評価の実際の一部】

次	評価規準 （評価方法）	意欲	見方	表現	知識	判断基準	教科書P 資料№
第二次 合同な図形（8時間）	・証明するための根拠をみつけようとする。（観察） ・根拠となることがらを明確にして，図形の性質を考察し，それを証明することができる。 （プリント）	○	○			・一つでも見つけようとしている。⇒Ｂ ・プリントの問題にある空欄に当てはまるものを書くことができる。⇒Ｂ ・プリントの問題の証明をすることができる。⇒Ａ	⑦ ⑦

【例：学週指導案の一部】

時間	学習活動	支援（・）　評価（◎）
20　追求する	・・・・・・・・・ ２．類題を行う。 (1)　各自で考える。 ・準備された４つの問題を行う。 ・１枚終わった生徒から次へ進む。 以下略	・・・・・・・・・・・ ・机間支援をしながら，仮定と結論の意味や問題の理解に乏しい生徒に対し，補助する。 ・理解度に応じ，１問終えた生徒から，各自で次の問題を持っていけるようにする。 ◎自ら，根拠となることがらを調べようとしていたか。 （関心・意欲・態度） ・調べ方が分からなかったり，調べる個所に迷っていたりした生徒には一緒に教科書で探す。 以下略

（４）成果の普及方策
○　「平成１４年度　単元別（題材別）評価規準表」と題した冊子の作成
○　「フロンティアスクール地区協議会」及び「きめ細かな指導推進協議会」での報告